

『平妖傳』四十回本考

——前身・轉生の關係を軸として——

堀

誠

一

明末の馮夢龍の集成編著になる『醒世恒言』卷四には、「灌園叟晚逢仙女」と題する話本を収めている。この話本は、花癡（花きちがい）の秋先老人が花卉を愛惜する心のゆえに昇仙するというものだが、物語の中ほどに、近所の張家の獄道息子が秋先の花園をわがものにしようとする謀み、秋先を折しも貝州で謀叛をおこした妖術使いの王則の一味であると訴え出る一節がある。ここに見える王則の反亂は、北宋の仁宗の慶曆七年（一〇四七）河北の貝州に發動した彌勒教勢力による反亂であったが、この王則あるいは反亂のことは、つとに説話人（講釋師）の舌端にのぼったらしく、それを源流としてやがて明末に『平妖傳』四十回本が成立するにいたる。この四十

回本は、馮夢龍が羅貫中の編次になるという二十回本に基づき、増補改作の筆を加えたものであるが、このような『平妖傳』の演變について考えると、「灌園叟晚逢仙女」の一節は、王則の反亂に對する民衆の感情や捉え方を反映している興味深い小説資料の一つであるといえる。

ところで、『平妖傳』四十回本では、反亂の中心人物となる王則を唐朝の則天武后、その妻となる胡永兒を張昌宗、そして反亂の平定に當たる文彥博を張柬之のそれぞれ轉生とし、それを中心にして前身轉生の關係を縦横に張りめぐらしている。このように前身・轉生のことを物語るのは、通俗文學の世界にあっては多々見られるところであるけれども、この四十回本の場合、反亂の中心人物となる王則を則天武后の轉生とするのみならず、胡永兒と文彥博についても前身を設

け、それぞれ則天武后と因縁の深い張昌宗と張柬之の轉生とするところが特異でもある。また、則天武后に注目してみると、彼女の登場する故事・小説類は、その数が少なくない。

そのなかで特に有名なのが、冒頭に取りあげた「灌園叟晩逢仙女」に挿入され、清の李汝珍の『鏡花縁』では第四、五回を構成する物語となっている牡丹の洛陽流滴の顛末を描いた故事であろう。しかも『鏡花縁』は、則天武后の時代に官界で志を得なかつた唐敖が外國貿易の船で異國をめぐり、その一方で娘の唐閨臣も父のあとを尋ねて航海するという長篇小説であり、則天武后も作中人物のひとつで、天星の心月狐の轉生と設定されている。そのほか、則天武后には一代記的な體裁で書かれた『如意君傳』も存在する。しかし、これらの故事・小説類と較べてみても、則天武后を王則の前身として登場させ、かつ因縁のある張昌宗・張柬之が揃いも揃って轉生するという趣向は、やはり異色であると思われる。

本稿では、四十回本の母體となつた二十回本との比較検討を踏まえながら、この四十回本に生まれた前身・轉生の關係の形成をめぐる考察を加え、馮夢龍による増補改作の一端を探ることにする。四十回本は内閣文庫藏『天許齋批點北宋三遂平妖傳』、二十回本は天理圖書館藏『三遂平妖傳』（天理

圖書館善本叢書「漢籍之部第十三卷」を使用する。

二

『平妖傳』四十回本において、王則・胡永兒・文彥博に關する前身・轉生のことは、具體的にどのように敘述されているだろうか。

このことが初めて現れてくるのは、第六回である。その一節は、雁門山下の老白牝狐の變身である聖姑姑の夢に、幽冥界をさすらう唐朝の則天武后が姿を現すという奇妙な構成をとり、その模様はふたりの問答形式で展開する。そのなかで、則天武后はみずから、來世において男に轉生することともに、

「卿（聖姑姑）有所不知。媚兒前身、乃張六郎、當時稱他貌似蓮花者。朕與六郎恩情不淺、曾設私誓云、生生世世願爲夫婦。不幸事與心違、參商至此、今朕爲君、彼復得爲后、鴛鴦牒已注定、豈可變哉。朕之發跡、當在河北、從今二十八年復與卿於貝州相見。卿宜琢磨道術以佐朕命。」聖姑姑の娘である胡媚兒の前身が、則天武后と淺からぬ關係にあつた張六郎（張昌宗）にはかならず、來世に男として生まれかわつた則天武后の后になる運命にあることを打ち開

け、二十八年後に河北の貝州で再會することを約している。このあと、「世世作對」の關係にある「八十翁」すなわち「漢陽王張柬之」に漏らすことなきよう注告するが、その折から、早くも漢陽王が計畫を聞きつけ押しよせてきたとの注進に、則天武后はあわてて逃げ出すありさまで、聖姑姑も後を追おうとするが、椅子につまずいてハッと目を醒ませば、則天武后の墳墓でみた一場の夢、と展開する。

このように第六回では、則天武后と張昌宗の轉生のこと、幽冥をさすらう則天武后の口から打ち開けられていたが、いまだこの二人が誰に轉生するのかは不明であり、このことが具體的に語られるのは、第三十二回、貝州の排軍の王則と胡永兒（胡媚兒の轉生）の婚姻をめぐる一節を待たなければならぬ。

……只因王則和胡永兒兩箇、一箇是武則天娘娘托生、轉女作男。一箇是張昌宗托生、轉男作女。他先前在百花亭上、罰了真願、願生生世世永爲夫婦。到今四百年來、重諧舊約、再結新歡。夫婦恩情、不須提起。一連的住了三日、真箇是玉軟香溫迷晝夜、花堆錦簇送時光。這也不在話下。

ここに至って、王則と胡永兒とが則天武后と張昌宗との性

別をかえた轉生であると明言し、再び睦みあう因縁についても言及されている。則天武后と張昌宗との淺からぬ關係については、第六回にも同様の敘述がみえていたが、進んで第三十七回、王則の反亂の平定に向けて、玉帝が太白金星李長庚と善後策を協議する一節には、則天武后の轉生である王則を多欲魔王の轉劫ともいう。

原來王則原是人趣修羅中多欲魔王轉劫、五百年一出世、或男或女、好淫好殺、應人間魔運而起。遇着昏君無道、攪亂乾坤。若撞了治世明王、其魔亦不能逞也。因是真宗皇帝偽造天書裝神說鬼、醞釀妖氣深重、所以生下王則、湊着魔運。幸是赤脚大仙治世、文曲武曲諸星、皆爲輔佐、不能成其大害。前劫武則天娘娘、福壽忒過分了。這一劫雖轉男身、事事減損、命中合居王位一十二年、遇天壽星而絕享年四十。

王則がもともと人趣修羅⁽¹⁾中の多欲魔王⁽²⁾の轉劫であることに始まり、五百年に一度世に出現する魔王としての性格を規定して、王則の宿運を秘めた身の上について物語っている。では、この魔王を滅ぼす天壽星とは誰なのか。つづいて、この天壽星についていう。

那天壽星是誰、就是招討使文彥博了。他在唐朝、姓張名

束之、一生抱文武全才、年近八旬、不得際遇、虧了梁國公狄仁傑薦爲丞相、領羽林軍勦滅了武氏、建立了李家。後因中宗皇帝不明、枉受貶死。上帝哀憐、使配天壽星之位、世享富貴遐齡。在五代爲馮瀛王、在今日爲文彥博。都是位極人臣、壽將百歲。當初則天之亂、是他平定了、今日王則之亂、仍要做他的功勞。天數已注定、非偶然也。天壽星とは、王則の反亂の平定に當たる文彥博であるが、もともとは唐朝の張柬之で、五代時代には馮瀛王⁽³⁾として生を賜わったこと、またこのたびも王則を滅ぼす運命をになつてゐるといふ。

このように、前身・轉生のことは第六回に則天武后みずから打ち開けるのを皮切りとして、第三十二回、第三十七回と回を重ねて漸次に真相が説き明かされている。第六回の則天武后と聖姑姑とが取りかわす話の内容は、後述するように在世中の則天武后の事蹟を捉えて構成され、その遣り取りも緊密である。しかも夢の中の會見という設定自體が奇抜であるし、則天武后が仇敵張柬之に追われて逃げるという收束のしかたは、轉生後の二人の關係を暗示するだけに、妙味ある趣向といえよう。これに對して、第三十二回・第三十七回における敘述は、内容的にも轉生にまつわる事實關係とその因

果を説くようなものだから、多分に説明的な口調になるのを免れないと思われる。その敘述によつて、王則・胡永兒・文彥博が則天武后・張昌宗・張柬之の轉生であつたことが明白化するけれども、では、則天武后らの唐代人物たちはお互いにどのような關係にあつたのか。王則ら小説中の宋代人物に則天武后らの唐代人物を重ね合せたのは、何を狙つたものであつたか。

まず前身たちの相互の關係について検討してみると、則天武后は、載初元年（六九〇）、唐朝を中斷して武周王朝を建て、史上初の女帝となつた人物であり、その後、六十歳を越えた女帝則天皇帝の類まれな寵愛をこうむつたのが、この張昌宗であつた。張昌宗⁽⁴⁾は高宗の重臣張行成の族孫にあたり、美男のはまれが高く、萬歲通天二年（六九七）、太平公主に推されて則天皇帝に近侍する幸運をつかみ、さらには兄の易之が丹藥を練るのに巧みである旨を奏上し、兄弟して親しく仕えるところとなつた。そして聖曆二年（六九九）のこと、則天武后は二人のために「控鶴府」を新設した（翌年には「奉宸府」と改稱した）。昌宗は「六郎」、易之は「五郎」と呼ばれ、二人とも白粉をつけて口紅をさし、錦繡の衣服をまといつた。また、昌宗はとりわけ容姿がすぐれていたので、阿諛便佞に

たけた者たちから、王子晉の後身とまでほめそやされた。王子晉とは、周の靈王の太子晉のことで、歷代神仙の一人として有名であるが、則天皇帝はその巧言に迎合したとみえ、昌宗は命ぜられるまま、王子晉ながらに羽衣裳をまどつて簫を吹き、木製の鶴にまたがり宮中を歩きまわったという。あるいは、宰相の楊再思にいたっては、人々が昌宗の容顏を「六郎の面かほは蓮花の如し」と絶賛すると、ひとり「然らず」といい、その理由わけを昌宗みずから問うと、「すなわち蓮花の六郎に似るのみ」と答えたと伝えられる。

こうした所傳に張昌宗の容姿は象徴され、その裏には則天武后の寵愛のほどがうかがわれるが、それとともに寵愛にまかせて昇官し、長安四年(七〇四)には春官侍郎に任ぜられ、さらに鄴國公に封ぜられた。そして則天武后が最晩年、病いのために長生院で療養すると、ただ張昌宗らが側近く仕えるだけで、朝政は壟斷されるにいたった。

この寵臣張昌宗こそ、四十回本が胡永兒(胡媚兒の轉生でもある)の前身と設定した人物にはかならない。先に引用した第六回において、幽冥界をさすらう則天武后が聖姑姑に、「……當時稱他貌似蓮花者。朕與六郎恩情不淺、曾設私誓云、生生世世願爲夫婦。……」と言ひ聞かせ、また第三十二回に

『平妖傳』四十回本考(堀)

「他先前在百花亭上、罰了眞願、願生生世世永爲夫婦。」と見えるのも、この史傳にさえ確認し得る張昌宗の器量と則天武后との深い絆を反映したものであろう。のみならず、張柬之も則天武后と因縁淺からぬ人物なのであった。

これも史的に確認しておくこと、張柬之は字を孟將といい、進士及第ののち經史に通じていたので重用されたが、聖曆元年(六九八)、講和のために突厥の送ってきた娘を則天武后が一族の武延秀に娶らせたとき、これに中華思想の立場から反對して逆鱗に觸れ、合・蜀二州の刺史に左遷された。しかし、長安年間(七〇一〜七〇四)のこと、則天武后から直に人材を要められた狄仁傑の推舉をうけて、ふたたび中央で司僕少卿、秋官侍郎となり、狄仁傑没後の長安四年(七〇四)、姚元崇に推されて鳳閣侍郎にうつり、政事に參與するにいたった。そして寵臣張氏兄弟を誅殺する謀議をめぐらし、神龍元年(七〇五)正月、ついに羽林兵を率いて張氏兄弟を誅殺するとともに、則天武后を政權の座から退け、中宗を帝位に復して唐朝の政治を回復した。しかも、この功績によって漢陽郡公、半年後に漢陽王に封ぜられしも權を失い、ついに願ひ出て故郷の襄州に歸ったが、武三思の誣告にあつて新州(龍州)に貶謫され、憤恚を抱いて没したのであった。時に八十歳であつ

たという。

文彦博の前身として設定された張柬之とは、このような生涯をおくった人物であった。先の第三十七回の引用文中に、「一生抱文武全才……枉受貶死」というのは、この張柬之の一生を概括したもので、溯って第六回、張柬之を「八十翁」「漢陽王」あるいは則天武后と「世世作對」といい、冥界をさすらう則天武后が張柬之に追われて逃げると設定するのは、この現世での關係を捉えて敷衍したものであろう。

以上の史的な検討から、王則・胡永兒・文彦博の前身たちの相互關係が明らかになり、その前身たちに關する敘述内容が、史的に確認し得る事蹟をとらえて形成されていたことも知られる。これによれば、四十回本が前身・轉生の關係を用いて宋代の人物に唐代の人物を重ね合せたのは、宋代の王則の反亂の平定される理由を、むしろ唐代の則天武后の事蹟を借りて、いわば宿命論により、合理的に説き明かそうとしたものといえよう。換言すれば、唐・宋の歴史を二重寫しにして、反亂の平定される枠組みを設定していたわけである。その意圖するところは、第六回に則天武后が語る轉生の宿運、また第三十七回の王則と文彦博に關する敘述に、如實に知ることができ、そこでは、單に則天武后・張昌宗・張柬之

を前身として設定しただけでなく、則天武后と王則とを「魔王」の轉劫とし、文彦博に對しては、この魔王を滅ぼす「天壽星」こと張柬之の轉生としている。こうして形成される兩者の宿命的な對立は、四十回本において重要な骨格となつていて、その對立する構造はさらに擴大強化されるところでもある。では、その軸となる則天武后・張昌宗・張柬之を前身とする設定、また王則と文彦博を「魔王」と「天壽星」とする設定は、どのようなところを據り所として發想されたものであつたか。以下には、この創作における基本的な問題に検討をおよぼしたい。

三

まず、則天武后・張昌宗・張柬之らの前身の設定について考えてみると、ともかく四十回本に前身・轉生の關係が生まれ、すでに検討したような宿命論的な構造が形成されるにいたつたのは、成立の上で四十回本の母體となつた二十回本的情節自體に由來するように思われる。その情節とは、二十回本第十三回、この回に初めて登場した王則が泥製の蠟燭を賣る胡永兒のあとをつけ、聖姑姑に引き合わされる場面で、聖姑姑がこの一介の排軍にすぎない王則に、

「且一面飲酒、與你商議。如今氣數到了、你上應天數、合當發跡、河北三十六州、有分交你獨霸。」

天數に應じて河北三十六州に發跡(立身)するとそそのかし、胡永兒を指しては、

「吾有此女、小字永兒、尙是女身、與你是五伯年姻眷。

今嫁此女與你爲妻、助你成事。你意下如何。」

胡永兒が王則と「五伯年姻眷」にあるといい、王則に結婚の意向を確かめていた事實である。つまり、二十回本すでに、王則の發跡を天の定めた宿運とし、かつ胡永兒との婚姻を「五伯年姻眷」としていたことが明らかになる。この事實を踏まえて考えてみると、四十回本における王則の反亂にまつわる宿命論的な結構や、少なくとも王則と胡永兒とに前身を設定する趣向は、ここに確認し得た二十回本自體に内在した宿命・宿縁的な要素のある情節を捉え、それを敷衍したものでなからうか。この一節のみえる二十回本第十三回は、四十回本の第三十一回としてほとんどそのまま用いられ、それのみならず、四十回本の先に引用した第三十二回には「到今四百年來、重諧舊約、再結新歡。夫婦恩情、不須提起」、第三十七回には、魔王について「五百年一出世」と見えていた。前者は「五伯年姻眷」に基づいた敘述であらうし、後者

は、王則の宿運を形成するなかで、「五伯年姻眷」を依り所にして魔王に付與された性格にほかならないであらう。こうした内容が四十回本に定着していることは、その増補改作がすでに指摘した二十回本の細部にわたる事象に着眼し、それを發展させ複雑化していたことの内的證左とならう。では、それとともに則天武后・張昌宗・張柬之をそれぞれ王則・胡永兒・文彥博の前身として設定したのは、那邊に由來するところであつたらうか。

この三人が結果的に前身として設定されているという事實からいえば、王則は二十回本によると、反亂におよんでのち東平郡王を稱したものの滅ぼされ、一方の則天武后も、帝位につきながら退位に追いこまれ、ともに哀れな末路を歩んだのであつた。また、「五伯年姻眷」に關していえば、王則と則天武后とが生存した時代は、約四百年しか離れていないけれども、その年數は一口に「五百年」と言ってもよいものであらう。このような點から、則天武后のことは『平妖傳』の情節に組み入れるのに恰好の材料であつたと推測されるが、この唐代の人物たちが何の脈絡もなく結び合されたのではなかつたと思われる。この前身・轉生の關係で結ばれた人物について考えてみると、まず注目されるのが王則と則天武后と

に共通する「則」字である。四十回本が則天武后らを前身として設定したのは、すでに指摘した「五伯年烟眷」と相俟って、この「則」に由来するものでなかつたらうか。

この點に關しては、四十回本第三十一回に挿入された王則の出身について物語った故事の一節に目を向けたい。

……那王則是第五胎生的。臨產這一夜、王大戸（父）夢見唐朝武則天娘娘特來他家借住、說道、「你家合生有福之男、興基立業、昌大門閭。」醒來時、恰好媽媽生下孩兒。王大戸大喜、取名王則、小名叫做五福兒、以記夢中之兆。

第五子の王則の生まれた夜、父である王大戸の夢に唐の則天武后が姿を現し、福分のある男子の生まれることを言いつたので、それに因んで王則と命名し、幼名を五福兒といつたという。この王則の出生と命名由来に關する一節は、四十回本の展開からいえば、第六回で則天武后の口からほめかされた轉生のことを一歩押し進め、この回に登場した王則こそその轉生人物であつたと豫感させるものである。しかも、この王則の出身故事は、二十回本の第十三回をほとんどそのまま襲用したこの第三十一回において、新たに挿入されたものにはかならないから、この一節は周到に用意された内容といえよう。しかし、こうして則天武后と王則とを命名由来で

結びつけていたことは、その兩者の結びつき自體がとりもなおさず「則」の字に由来していたことを、暗に物語っているように考えられるのである。

このような王則と則天武后との結合を軸として、王則と「五伯年烟眷」の關係にある胡永兒には則天武后の寵臣張昌宗を、また反亂の平定にあたる文彦博には則天武后を退位に追いこんだ張柬之を、それぞれ前身として配したものと推測されるが、それとともにその轉生に關する敘述内容は、史的事實のみでなく、冒頭に觸れた牡丹の洛陽流謫故事などの所傳をも吸收攝取しながら形成されたようである。

この點についても検討しておく、則天武后による牡丹の洛陽流謫の故事は、文獻的には古く宋の高承の『事物紀原』卷十「牡丹」にその源流となる話が記載されるのをはじめとして、今日にいたるまで民間故事としても相傳されている。⁽⁹⁾また、『全唐詩』卷五には「臘月宣詔幸上苑」と題する則天武后の詩を收め、詩作の背景として、天授二年（六九一）臘月、花咲いたと稱して卿相たちが上苑への出御を要めると、則天武后は謀略ありと察知して開花の詔を出した、すると果して名花が咲いていて、群臣はかえって感服した云々と見えている。これは、宋の計有功の『唐詩紀事』卷三「武后」に基づ

いたものだが、そのほか則天武后の一代記の體裁をとる『如意君傳』には、同じく天授二年孟冬のこと、則天武后は張昌宗兄弟と上苑に遊ばんとして詔を出したところ、百花ともに花咲いた、とある。あとの二つには、牡丹の流滴の件は見當たらないけれども、いずれも則天武后と百花をめぐるエピソードとして興味つきないものがある。

ここで『平妖傳』四十回本に目を轉じてみると、第六回の則天武后が過去を追想して詠じた五言律詩の初句には「百花王」とあり、さらに第三十二回には、「他先前在百花亭上、罰了眞願、願生生世世永爲夫婦」という一文も見える。この「百花王」や百花亭での張昌宗の誓いのことは、牡丹の洛陽流滴故事をはじめとする則天武后にまつわる花の所傳を捉えたもので、その故事に張昌宗が關與している點では、とりわけ『醒世恒言』の故事、ないしは『如意君傳』の一節に類似するところがあるといえよう。また、この『如意君傳』には、『大雲經』の偽作に従事した薛懷義、「蓮の面」と稱された張昌宗とその兄易之、そして「如意君」と異名された薛敖曹らが相次いで登場する。しかも結末は、彼らのなかでも類稀な恩寵をこらむった薛敖曹が、ついに意を決して宮中を去り、その一方で、張昌宗兄弟が則天武后の寵愛を取りもどしたも

『平妖傳』四十回本考(堀)

の、やがて張柬之らに誅殺される、というものであった。この結末の故に、『平妖傳』四十回本に王則らの前身として出現した則天武后・張昌宗・張柬之は、『如意君傳』に登場した則天武后ら三名の再來であつたかとさえ思われるのである。その上、四十回本第十五回にみえる宦官の雷允恭と胡媚兒(胡永兒の前身)との結婚を擲擻した詞には、「……積下那一世兒、做箇薛敖曹的徒弟……」というように薛敖曹の名も詠みこまれているのであつた。ところが、この薛敖曹は『如意君傳』に登場こそすれ、實在した人物であるのかは、不明である。また『如意君傳』の成立についても詳らかにせず、孫楷第『中國通俗小說書目』卷四「明清小說部乙」にも、清の黃之雋『唐堂集』卷二十一「雜著五」の「詹言下篇」の一條を引いて、「據此則如意君傳亦明人作」(此れに據れば則ち如意君傳も亦た明人の作なり)と指摘するにとどまる。しかし、『平妖傳』四十回本に薛敖曹の名が見えることは、その四十回本の情節が、少なくとも牡丹の洛陽流滴に代表される則天武后にまつわる花の故事ばかりでなく、『如意君傳』やそれに類する稗史・所傳をも反映していたことを示しているだろう。これによれば、王則らの前身として則天武后らを設定したこと自体も、『如意君傳』のごとき則天武后にまつわる小説

や所傳の流行を反映したものでなかったか、と推測される。特に四十回本に増補改作された内容は、明らかに出典のある話を點綴するとか、『西遊記』や『水滸傳』などの人物や事象にヒントを得ているとかのものが多⁽¹⁾いようである。この四十回本の増補改作の特徴の點からも、前身人物の設定に關しては、すでに指摘した二十回本に内在していた「五伯年姻眷」や「則」字との絡まりとともに、當時における「如意君傳」などの則天武后にまつわる故事の流行にも想到されるのである。

四

前身・轉生の關係により宋代人物に唐代人物を接合するとともに、王則を「魔王」とし、文彦博を「天壽星」とする形象も加えられていた。兩者が相對立する關係にあり、魔王が天壽星に滅ぼされる運命にあることは、すでに引用した第三十七回の一節に詳しく説明されていたが、この魔王と天壽星という形象は、それぞれどのようなところから生まれたものであったろうか。この魔王と天壽星をめぐって検討を加えてみる。

まず、魔王については第三十七回において、五百年に一度世に出現して淫蕩殺戮を好むこと、また魔運に乗じて現れ、

無道の君王に遇うと世の中を攪亂し、有道の君王のもとでは魔を發揮できないという宿運が説かれている。さらに、このたびの出世について、宋の第三代皇帝眞宗が天書すなわち大中祥符を僞作したために妖氣が深重したことに原因をもとめ、文曲・武曲兩星の補佐する赤脚大仙すなわち仁宗の治世にあつては、大害をなすにいたらず、このたびは男子に生まれたとはいえ、王位にあるのも十二年、天壽星によって四十歳で滅ぼされるともいう。このように魔王としての枠組みが設定されていたが、そもそも魔王のことが初めて現れてくるのは、第六回、幽冥界をさすらう則天武后と聖姑姑との會見の場面であつた。この第六回の敘述内容にも検討をおよぼしてみると、そこでは、不意の拜謁に恐縮の態の聖姑姑に向かつて則天武后は、

「卿勿以非人自嫌。卿乃狐中之人、朕乃人中之狐。讀駱生檄、至今寒心、朕反愧卿耳。」

駱生すなわち駱賓王の檄文を讀んでからというもの、今に至るまで心おののいている胸中を傳え、獸身の聖姑姑に慚じている。そして「朕本百花王、權閩人間帝」を首聯とする五言律詩を詠じては、

「朕那時甚惜駱賓王之才、獻俘時、聞有他的首級、不忍視

之。誰知首級是箇假的、駱賓王逃去爲僧。從來做官的欺蔽朝廷、都似此類。外人猶以朕爲誅戮太甚、公道何在。」駱賓王の才能を惜しみ、その首級を實檢するに忍びなかつたと舊事を述懐しはじめ、實は駱賓王が逃れて僧になつたにもかかわらず、そのことを隱蔽した官吏の僞瞞を引きあたりに出し、自分のみがはなはだしい誅戮を責めたてられる不公平を慨嘆している。

ここに現れる駱賓王が初唐の四傑に數えられる詩人であることはいうまでもなく、また則天武后といささかの因縁のある人物でもあつた。⁽¹²⁾ 則天武后は顯慶五年(六六〇)、病床についた高宗に代わつて萬機を決するにいたり、弘道元年(六八三)に高宗が没すると、その後を繼いだ中宗をわずか五十餘日で廢して睿宗をたてるが、この一連の則天武后の專横に對して、その翌年、揚州の地で徐敬業らが擧兵した。その擧兵に際して、檄文をしたため則天武后の罪業を指揮したのが、この駱賓王であつた。その檄文は、「一抔土未乾、六尺孤何在(一抔の土未だ乾かざるに、六尺の孤何くにか在る)」の句で殊に有名であるが、この檄文を目にした則天武后は、はじめせせら笑つてはいたが、やがてこの句に讀みすすみ、書き手が駱賓王だと知るや、「宰相がこれほどの人物をうち棄てておいて

よいものか」と感嘆したという。その後、反亂があえなく失敗におわると、駱賓王は逃れて行方知れずになつたと傳えられるが、元の辛文房の『唐才子傳』卷一「駱賓王」によれば、杭州の靈隱寺に遊んだ宋之問が「靈隱寺」詩を苦吟していると、僧に姿をかえた駱賓王が、その詩篇の警策と評される領聯の「樓觀滄海日、門對浙江潮」を教示し、翌朝には姿をくらましていた、という所傳も存在する。その眞實のほどは確かめるすべもないけれども、ともかく『平妖傳』四十回本の敘述内容は、史傳類にも知り得る駱賓王に關する所傳をとらえていたことは、否めないであろう。

さらに續いて、則天武后は、和尚となつた駱賓王が天に昇るを得たものの、自分ははまだ幽冥界のうちをさすらう身上であり、あるいは自分の身が殺運のいたる時に天から遣わされた魔王にはかならず、唐末に生まれた黃巢も魔であることは同じで、その反亂に際して則天武后の朽骨が汚辱にさらされた理を言いきかせている。これに對して、聖姑姑がすかさず、

「聞天后在位日、鑄像造塔、廣作佛事、功德不小。爲何尙滯於冥途也。」

則天武后の在位の時には、廣く佛事を心がけ、少なからぬ

功德を積んだのに、何故冥界にさまようのかと理由を問うと、則天武后は、

「凡人先發清淨心、後獲布施福。朕居心不淨、脩成魔道。當時享盡女福、單恨不得爲男、佞佛祈求、無非爲此。今因緣將到、已蒙上帝遣作男身矣。」

男になれない恨しさのために、不淨の心のままに發心して魔道を修めたことを告白し、いま因縁として男子に生まれかわる上帝の命令を得たとも語る。さらには、

「既成魔道、必乘魔運而生。若無權勢、魔力安施。朕前是女身、且爲帝王、何況男乎。卿女媚兒、冥數合爲朕妃。……」

魔道を修めたからには、魔運に乗じて生まれる宿運にあり、聖姑姑の娘の胡媚兒が男に生まれかわった則天武后の妃となる運命にあることを打ち明け、すでに引用したところの「卿有所不知」以下の部分へと展開してゆく。

則天武后がみずから轉生のいわれを説き明かしてゆくことばには、宿運論的な色彩が濃厚に表れている。この敘述内容についても史的に検討してみると、先に記した徐敬業の亂のうち、則天武后は徐々に唐室の諸王を除いてゆき、ついに武周革命を斷行するにいたるが、この史上初の女帝の誕生に際

しては、則天武后の寵愛を受けた薛懷義ら十名の僧侶により僞作された「大雲經」の果した役割が多大であった。その經文には、則天武后が授記(豫言)により天下に君臨する因縁、あるいは則天武后が彌勒佛の下生の身で、閻浮提主となり、唐朝の衰退するという宿運が説かれていたと見られている。⁽¹³⁾

この經典により則天武后の即位する雰圍氣が熟し、果して六九〇年、唐にかわって國號を周と改め、年號を天授と改めた。そして「大雲經」の僞作にあたった僧侶たちには授爵褒賞が行われ、佛教を唐室が老子(李聃)と同姓であることから尊崇してきた道教の上に置き、佛教への援助を惜しまなかったのであった。先の引用文中にみえる「誅戮太甚」とは、則天武后による唐室諸王らの殺戮を指したもので、ここに聖姑姑がいう「聞天后在位日、鑄像造塔、廣作佛事、功德不小」とは、則天武后が在世中に佛教を厚く信じ保護したという所業を指したことばであろうし、また則天武后のいう「魔道」を修めた云々の告白は、「大雲經」の僞作にからむ則天武后の佛心をとらえたものではなからうか。

このように、第六回にみえる則天武后の轉生にまつわる敘述内容は、駱賓王とのことをも含めて、則天武后の事蹟や所傳に依據しながら形成されていたことが明白である。しか

も、則天武后の身の上を象徴する「魔王」「魔道」「魔運」は、本来、佛教方面の語彙であつたから、ここに展開する轉生のいわれは、佛教的な宿命論といつてよいものであらう。とすれば、この「魔王」とは、單に邪惡の象徴としての意味をもつものでなく、則天武后に關する彌勒佛下生の説を把捉し、それをこの象徴的な概念を表すことばに置き換え、平定される王則の像としたものでなかつたらうか。この魔運に乗じて生まれる魔王の性格は、第三十七回により具體的に説明されていたが、因みに、この『平妖傳』の題材となつた王則の反亂は、彌勒教徒を中心にした一大宗教反亂で、王則もまた彌勒佛下生の身とされた人物であつた。四十回本において、王則と則天武后とを前身・轉生の關係で結び付け、さらに魔王の形象を付與したのは、この王則と則天武后とに共通する事象にも原因するもので、それを象徴的に表現しようとしたものであつたかも知れない。

一方、この魔王と對立關係にある天壽星の場合はどうであらうか。第三十七回には、中宗の不明のために憂憤を抱いた張柬之を上帝が憐れみ、この天壽星に配して世々富貴と長壽をうけさせたという。その敘述は、すでに検討したように張柬之の事蹟を概括して記されていたが、この張柬之は、確か

に八十數歳で没しており、第六回には「八十翁」とも稱されていた。一方、その轉生とされた文彥博は、北宋の仁宗・英宗・神宗・哲宗の四代にわたり仕えた名臣であり、紹聖四年（一〇九七）に九十三歳で没していた¹⁴。これによれば、世々富貴と長壽を約束された天壽星とは、張柬之・文彥博ともに長壽を誇りながら、かたや張柬之は薄幸の末路を歩み、かたや文彥博は榮譽を一身にうけていたという好對照な生涯に着眼し、それをむしろ文彥博の側に引きつけて象徴化したものと推測される。また第十八回には、文彥博が守護神の九天玄女から夢の中で贈られた「人間名宰相、天上老人星」という十字が見えるが、その「天上老人星」も、天壽星と同質の意味をもつことばにほかならないであらう。

王則と文彥博の像は、こうして魔王と天壽星によつて象徴されるところとなつたが、この兩者の對立構造は、さらに強化増幅されている。すなわち、第十四回に眞宗の大中祥符の偽作事件のこゝを取り入れ、それを魔王である王則の出現した原因とし、その一方で、同回に眞宗の皇子（のちの仁宗）が天上界の赤脚大仙の轉生であつたと物語る故事を挿入し、この明君のもとでは魔王も大害をなし得ないとの枠組みを設けている。さらに第三十八回には、文彥博の九天玄女信仰につ

いて觸れて、のちに九天玄女が王則の反亂の平定にあたる文彦博を陰から援助する、という構圖を作り出してゐる。このように、魔王と天壽星との對立が、それ自體で收束せず、さらに二重三重に糸が張りめぐらされ、「魔」に對する「神」の側を強化し、「魔」そのものを抑制していたことは、四十回本に創出された全體構圖としてまた興味深いものといえよう。

五

『平妖傳』四十回本では、前身・轉生の關係により唐宋の歴史を二重寫しにし、魔王と天壽星が宿命的に對立する「神魔」構造を創出してゐる。本稿では、前身・轉生の關係を軸として、四十回本の創意着想の一端を探つてみたが、さらに二十回本との對校を踏まえてみると、この構造が生まれるには、細部にいたるまで二十回本の内容が改變されていたことも明らかになる。その一例を挙げれば、文彦博の年齢については、二十回本にその記述はないものの、四十回本では第三十八回において八十歳とする。しかし、實のところ文彦博が王則の反亂の平定に従事したのは、四十三歳のときであつた。この年齢の設定などは、文彦博を天壽星張柬之の轉生とするなかで、事實としての年齢を改變しながらも、「八十翁」

張柬之に重なり合う像を創り出そうとしたことを示してゐよう。その裏を返せば、四十回本の「講史」的性格が二十回本よりさらに希薄になつたとも見られるが、ともかく四十回本は二十回本に基づきながらも様相を一新した。新たに生まれつた情節には、宿命論的色彩が濃厚に表れ、反亂の鎮定に關してはあまりに説得力をもちすぎるうらみもある。とはいへ、物語自體が回轉する因果の齒車にあわせて重厚さを増していることは、『平妖傳』四十回本を四十回本たらしめてゐる成分の一つとして評價し得るものといえよう。

〔注〕

(1) 「人趣」は、「六趣」(六道)の一つで、人間界をいう。

「修羅」も、「六趣」の一つである「修羅趣」を指すのである。文中の「人趣修羅」とは、「人趣」と「修羅趣」とが混然一體となり用いられたのであろうか。

(2) 「魔王」とは、欲界(三界の一つ)の第六天である他化自在天の主、波旬を指す語である。

(3) 「馮瀛王」とは、五代時代の馮道を指すものと推測される。その傳は、『舊五代史』卷百二十六、『新五代史』卷五十四に見える。

(4) おもに『舊唐書』卷七十八、『新唐書』卷百四の張昌宗傳(張行成傳附傳)による。

- (5) 『舊唐書』卷九十「楊再思傳」による。
- (6) おもに『舊唐書』卷九十一、『新唐書』卷百二十の「張柬之傳」による。
- (7) 魔王を「五百年一出世」は、「五百歳にして聖人出づ」をもじったものであったかも知れない。
- (8) この王則の出身を物語る故事は、『水滸傳』第百一回に設定されている王慶の出身を物語った故事から考案されているものと推測される。この点については、拙稿『平妖傳』に見える『水滸傳』の影——馮夢龍による増補改作をめぐって——(『早大』『中國文學研究』第八期所收)を参照されたい。
- (9) 牡丹の則天武后による洛陽流滴の故事については、拙稿『流滴の花』(『節令』第二期所收)に所傳の展開について考察を加えた。
- (10) 駒田信二(『則天樓の妖帝』、『中國妖姫傳』所收、講談社)には、「……稗史には、……さらに壮大異常な薛敖曹という人物が登場する。それは僧懷義が殺されたあと、武后は七十二歳のときである。」という指摘が見える。文中の「稗史」とは、とりもなおさず『如意君傳』を指していると推測される。また、如意君のことは、『警世通言』第三卷「王安石三難蘇學士」にも見えている。
- (11) たとえば、四十回本に新たに設定された袁公(のちの白猿神)には、『西遊記』における弼馬溫時代の孫悟空に近い姿が見え、天界で平穩無事な生活を送るうちに事件をひきおこ

『平妖傳』四十回本考(堀)

- すところも、お互いに相似た設定といえる。また『水滸傳』に關しては、注8所掲の拙稿を参照されたい。
- (12) 駱賓王については、『舊唐書』卷百九十「文苑傳上」、「新唐書」卷二百一「文藝傳上」による。
- (13) 「大雲經」については、『舊唐書』卷六「則天武后紀」に「(載初元年)秋七月(中略)有沙門十人僞撰大雲經、表上之、盛言神皇受命之事。制頒於天下、令諸州各置大雲寺、總度僧千人」、「新唐書」卷七十六「則天武皇后傳」に「(載初中(中略)拜薛懷義輔國大將軍、封鄂國公、令與群浮屠作大雲經、言神皇受命事」、「舊唐書」卷百八十三「薛懷義傳」に「懷義與法明等造大雲經、陳符命、言則天是彌勒下生、作閻浮提主、唐氏合微」と記されている。また彌勒佛下生の説については、重松俊章(『唐宋時代の彌勒教匪——附更生佛教匪』、『史淵』第三號所收)を参照した。
- (14) 『宋史』卷三百十三「文彥博傳」による。